

青丘文庫研究会 月報

No.303
2024年5月6日

青丘文庫研究会 〒657-0051 神戸市灘区八幡町 4-9-22 (公財)神戸学生青年センター内
TEL 078-891-3018 FAX 078-891-3019 <https://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>
年間購読料 3000 円。在日朝鮮人史研究関西支部会費 5000 円/年 (雑誌 3 冊を入手できます。)

NHK大河ドラマと「朝鮮出兵」

梶居佳広

大学院修了後、日本国憲法改正の是非や日韓・日中関係をめぐる全国紙・地方紙の論調調査を「商売」とし、北は青森から南は鹿児島まで「古紙回収」する出張の機会に恵まれた。尤も、公立図書館が設置されている県庁所在地に訪問先が偏っていることは否めず、にもかかわらず「繁栄」する東京と比べ県庁所在地といえども軒並み衰退している現実を突きつけられるので楽しいばかりの旅ではない。

ともかく地方は程度の差はあれ人口減少や基幹産業衰退に悩まされているのであるが、打開策の一つとして「町おこし」が各地で展開されている。ひこにゃんやくまモンといったキャラクターを使った PR やふるさと納税目当ての特産物発掘が一例であるが、NHK 大河ドラマに取り上げられることもまた「大きな効果」が見込めるものと考えられているようだ。事実、県庁所在地に限定しても水戸では水戸光圀、岡山では宇喜多家、大分では大友宗麟を主人公にする運動が存在するが、最近地元紙論調で関心を持った熊本においては当然加藤清正を大河ドラマの主人公にしようという動きが見られる。昨年 5 月にも「加藤清正公の大河ドラマを実現する熊本県民の会」が 10 万人強の署名を NHK に提出したが、実に 9 回目らしい (『熊本日日新聞』5 月 17 日)。実のところ 1976 年「池波正太郎原作『火の国の城』、加藤剛主演」で決まりかけたこともある (実際は放送局長の反対で平将門を主人公にした『風と雲と虹と』に変更。以上、大原誠『NHK 大河ドラマの歳月』参照)。ゆえに今後大河ドラマに取り上げられる可能性は大いにあるといえよう。

されど加藤清正を主人公にした場合、豊臣秀吉による文禄・慶長の役＝「朝鮮出兵 (以降、朝鮮侵略とも記す)」はどういう扱いになるのだろうか。いうまでもなく加藤清正は、特に「文禄の役」において威鏡道から現在の中国東北部まで兵を進めるなど大いに「活躍」し、逸話レベルであるが虎退治をしたことでも有名である (なお熊本市内の加藤神社には「文禄役記念 清正公の旗立石」が現存する)。清正を主人公にした場合、これら事績を落とすことは出来ない。ただ清正の主君である豊臣秀吉としては明征服が目的であったとしても、朝鮮半島に軍事侵攻し甚大な損害を与えたこともまた間違いないのである。

ここで確認すべきは、実のところ大河ドラマにおいて秀吉の朝鮮侵略はこれまではほとんど取り上げられてこなかったという事実である。尤も、筆者は大河ドラマを久しく視聴していないので断定はできないが、新聞・SNS 情報による限り、朝鮮侵略は陣中・船上の台詞やナレーションで「処理」されてしまい、戦闘シーンなり朝鮮の動向が映像化されたという話は聞かない。戦国時代は大河ドラマで数多く取り上げられてきたにもかかわらず、である (後で触れる『黄金の日々』という例外もあるが)。紹介しない (できない) 理由として、朝鮮

の風景・建造物・服装についての時代考証、現地ロケなら勿論、セットを設営するにしても相当な出費が必要であることが現実には大きいと考えられる。とはいえ歴史問題でしばしば衝突しがちな日韓関係への配慮も多少はあったのではないだろうか。

この点大河ドラマで具体的に朝鮮侵略を取り上げた数少ない事例である『黄金の日日』(1978年放送、筆者が最初に視聴した大河でもある)の場合、朝鮮使節と秀吉の謁見から出兵、漢城陥落までの流れを簡単なセットで映像化しているが、主人公(堺の豪商納屋助左衛門)並びに早期講和志向の小西行長、宗義智(そして意外にも石田三成)が「善玉」、徹底した権力亡者で主人公に敵対する豊臣秀吉は悪役として描かれている(なお加藤清正は行長や三成に反発するも主人公に騙される「やや思慮の欠いた武闘派」という扱いである)。注目すべきは史実でも秀吉に謁見した使節の一員である許箴であろうか。ドラマでは日本語に通じ、主人公と連携するという設定であるが、なんと戦前からのプロレタリア演劇運動の中心人物で革命歌「インターナショナル」の日本語訳詞でも知られる佐々木孝丸が扮している(なお李麗仙さんが堺に流れ着いた重要な脇役として登場するが朝鮮侵略の場面には絡んでこない)。ゆえに主人公との普段の会話は日本語であるが、漢城陥落の炎をみるや朝鮮語で次のように主人公に訴えるのだった。

「われらが祖国の美しき都を奪った日本人よ、罪なき多くの人々の生命を奪った日本人よ、わが祖国より立ち去れ！」

『黄金の日日』は一方でかなりの程度の史実改変のほか、漢城を京城と呼称するなど現在からみて問題と思われる箇所も多い。とはいえ同時期放送の『風と雲と虹と』『獅子の時代』と同様、国家権力に抗する主人公というストーリーのためか朝鮮侵略についても簡単ではあるがそれなりに踏み込んでいると評することもできる。現在このような放送をすればSNSで批判され「炎上」するかもしれない。

さて加藤清正に近い将来大河ドラマの主人公になれば熊本は観光業を中心に盛り上がるだろうが「朝鮮出兵」はどう描かれるか? 21世紀に入ってから大河ドラマは視聴していない筆者であるが、仮に清正の大河が実現したら少なくとも朝鮮侵略の部分は視聴してみようと考えている。戦後のある時期まで、個性的な論調であった有力地方紙『熊本日日新聞』の反応も調べに「古紙回収」に出かけることになるだろう。

日韓関係、特に歴史問題をめぐる日本の新聞論調(2022年~2023年) 梶居佳広 (2024.1.14 朝鮮近現代史研究会)

元徴用工判決(2018年10月)以降、日韓関係は「戦後最悪」になったといわれるが、日本の新聞メディアは日韓関係についてどのような主張を展開していたか。以前報告者は徴用工判決直後の動向を調査し、安倍内閣総辞職までの各紙社説一覧を公表している(『立命館経済学』第69巻第3号、参照)。本報告は続編として2022~23年の各紙論調を調査したものである。

2022年3月の大統領選挙で尹錫悦が当選、政権交代が実現すると、日本の各紙は韓国側の政策転換による関係打開を期待する論調が目立って増えるようになる。翌2023年3月、元徴用工をめぐる問題について韓国政府が日本企業の賠償を肩代わりするとの韓国側提案で日韓政府が合意。その直後尹錫悦大統領が日本を訪問し日韓首脳会談を行うと、大多数の新聞は一連の韓国側言動を評価し、関係改善のため日本側も努力すべきとの見解をより強く打ち出すようになった。

ここで注意したいことは2点。まず日本の大多数の新聞は植民地支配に「負の側面」が多々あったことは認めている。2022年1月に問題化した佐渡金山・世界遺産推薦の是非については、「韓国に丁寧な説明を行わない」日本政府の態度をまずもって問題視し、2023年9月の関東大震災100年に際しては一定数の新聞が朝鮮人

虐殺事件に言及している。一般紙についていえば、歴史否定論或いは「嫌韓」に親和的な論調の新聞は『産経新聞』、次いで『北國新聞』にとどまる。この点『読売新聞』は「個々の事例（慰安婦など）」では日本政府主張に同調する一方、「併合100年」における菅首相談話も賛同するスタンスであるが、尹錫悦大統領の政策転換を（『日本経済新聞』と共に）非常に肯定的に評価している。このため日韓合意に関する『読売新聞』と『産経新聞』の評価は際立って対照的であった。

2点目に、とはいえ「歴史」をめぐる諸問題は1965年の国交正常化で解決済みであるというのが大多数の新聞の見解であった。日本政府に批判的な新聞の多くは1990年代以降進められた日韓関係の「手直し」を評価するなど国交正常化時の取り決めに不十分なところがあったことは認めている。しかし「被害当事者の意向を無視しているのではないか」という問題より「これまでの約束や合意の遵守優先」を当然視する新聞が大多数であって、元徴用工判決以降の関係悪化はこれまでの秩序を逸脱しようとする韓国側（司法、文在寅政権）の言動に非があり、「道理もない」との認識であった（『信濃毎日新聞』や『琉球新報』のように、「加害者」たる日本側に被害者が納得する提案を求める新聞も存在するが）。

結局、戦後積み上げられた日韓関係の維持発展、アメリカも加えた連携強化の推進が現在日本のほぼ全ての新聞のスタンスである。「過去の直視」も必要だろうが国家間の合意と「未来志向」を重視すべきという主張もいえる。この枠組み・主張を崩すような動きに対しては今後も批判的な社説・論説が全国の新聞紙面で数多く掲載されるであろう。

<青丘文庫研究会の記録>

月報が2023年11月以来の発行となってしまいました。この間、メールニュースを発行していました。メールニュース希望の方は、飛田雄一 hida@ksyc.jp までメールをお願いします。以下、のちのちの青丘文庫研究会歴史のために以下記録を掲載しておきます。

- ・ <2023年>11月12日（日）在日（松下佳弘「滋賀県での朝鮮人学校閉鎖から民族学級成立の経過」、近現代史（趙正熙「崔承喜の生年月日の誤りについての考察—韓国と朝鮮と日本、そして世界各国の記録を中心に」）
- ・ 12月10日（日）在日（堀内稔「神戸市の冬期失業救済事業と朝鮮人労働者」、近現代史（お休み）
- ・ <2024年>1月14日（日）午後2時～近現代史（梶居佳広「2022～23年の日韓関係をめぐる日本の新聞論調」、午後3時半～在日（試写会、上映作品は二つあります。）①『長き眠り（So Long Asleep）』（2016年/監督：ディビッド・W. プラス /60分/日本語字幕） 予告：<https://youtu.be/qTfLC7eRi8o>、②『2023年10月28日「交流の家」での湯浅進さんのインタビュー』約20分（製作中）上映後、ご意見やご感想などお聞かせいただき、次回の生野区での青丘文庫の上映会に反映させたいと思います。次回の生野区での上映日時、上映場所はまだ未定です。（金稔万）
- ・ 2月11日（日）午後3時半～在日（大槻和也「二重の課題」論の深化、朝鮮史学からの応答——梶村秀樹による指紋押捺拒否運動からの触発）、近現代史はお休み
- ・ 3月10日（日）午後2時～在日（韓光勲「関東大震災をめぐる調査・追悼運動はいかに行われてきたか」、午後3時半～近現代史（趙正熙「崔承喜のマルセイユ公演—フランス革命150周年と三一革命20周年記念公演」）
- ・ 4月14日（日）在日（高木伸夫「在野研究者のマイノリティー研究について—小野寺逸也のマイノリティー研究と旧蔵史料紹介」、近現代史（堀内稔「デシュラーと朝鮮人ハワイ移民、そして神戸」）

【お知らせ】

- ・ 2024年度（4～3月）の会費をお願いします。青丘文庫研究会は①在日朝鮮人史研究関西西部会と②朝鮮近現代史研究会の総称です。年会費は3000円、印刷版の月報および青丘文庫会員証をお届けします。但し学生会員で印刷版月報の不要な方はこの会費が不要です。飛田までその旨連絡ください。①在日研究会は別途5000円の会費が必要です。この会員には、年1回発行の『在日朝鮮人史研究』が3冊送られます。送金先はいずれも郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>です。

●青丘文庫研究会●

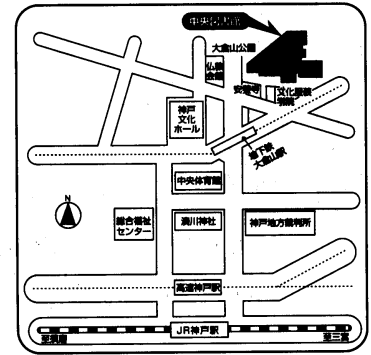
2024年5月12日(日) 午後2時～5時

在日朝鮮人史研究関西部会 在日映画上映会、①『倭奴(イエノム)へ 在韓被爆者・無告の二十六年』(1971/52分/DVD) スタッフ:井出情報、井上修、斉藤憐、布川徹郎、企画:竹中労 製作:「倭奴へ」製作推進委員会、概要:1971年、佐藤栄作首相が朴正熙大統領の祝賀パーティのために訪韓した。在韓被爆者8名は直訴状を持って日本大使館に向かった。

カメラはその8人を追う。

②『倭奴へ それから』(2018/40分/DVD) 撮影・編集:金稔万、概要:それから、37年後の2008年、布川徹郎はそれまで観ることが叶わなかった『倭奴へ…』を観てもらうために韓国に渡航し、3人の在韓被爆者に再会する。折からソウルではロウソク集会が連日行われていた。同行した金稔万がその布川徹郎をカメラで追う。／朝鮮近現代史研究会は休みです。／資料代500円

会場 青丘文庫(神戸市立中央図書館内、TEL 078-371-3351、新館3階で身分を証明するものだして入館証を受け取り4階会議室にお越しください。) ZOOM 中継はありません。



【今後の研究会の予定】

- ・ 6月9日(日) 在日(松下佳弘「滋賀県における朝連・民青に対する財産接収措置ー滋賀県行政文書を手がかりに」)、近現代史(水野直樹)
- ・ 7月14日(日) 午後2時～、在日(韓光勳「朴慶植による朝鮮人虐殺の調査をめぐって」)、午後3時半～、近現代史(松坂裕晃「植民地期朝鮮の社会主義に関する一考察ートランスナショナルな視点から」(仮))
- ・ 8月23日～25日、日韓合同在日研究会、韓国大邱(詳細は後日)
- ・ 9月8日(日) 在日(未定)、近現代史(未定)
- ・ 10月13日(日) 在日(未定)、近現代史(池山一男「1930年代、李北満ら朝鮮人による『アジア的生産様式』について」(仮題))
- ・ 11月10日(日) 在日(予定、神戸映画資料館で在日映画)、近現代史はお休みです。
- ・ 12月8日(日) 在日(未定)、近現代史(未定) ※報告希望者は、飛田または水野直樹に連絡ください。

【編集後記】

- ・ 季節の移り変わりがなんとなくおかしな今日このごろですが、みなさんいかがお過ごしでしょうか。不定期刊行となっている「青丘文庫研究会月報」5月号をお届けします。会員の方には、会員証も同封します。会員資格等については別項の「お知らせ」をご覧ください。メールニュースは、広く無料でお送りしています。送付希望者は、飛田 hida@ksyc.jp まで連絡ください。
- ・ 今年8月、久しぶりに日韓合同在日研究会を韓国大邱で開催します。この研究会は、2年に一度、在日朝鮮人史研究関西部会、同関東部会、韓日民族問題学会が交替で開催しているものです。今年は11回目です。以下、記録です。●1 2003年、滋賀県、滋賀県立大学、朴慶植文庫見学、大阪フィールドワーク●2 2005年、韓国(釜山)●3 2007年、東京、●4 2009年、神戸、●5 2011年、韓国 SEOUL 研究会(光云大学)、仁川フィールドワーク、●6 2013年、東京研究会、川崎フィールドワーク、●7 2015年、神戸研究会・高槻フィールドワーク、●8 2017年、韓国(群山)、●9 2019年、東京研究会、相模湖フィールドワーク●10 2022年 ZOOM 研究会(関西部会担当) 参加希望者は、5月末までに飛田に連絡ください。飛田雄一 hida@ksyc.jp